

陽明文庫蔵 伝後醍醐天皇筆本『和漢朗詠集』

— 増補詩歌からの位置づけ —

はじめに

陽明文庫に所蔵される「和漢朗詠集」として最も名の知られているものは、「和漢抄」とも呼ばれる「近衛本和漢朗詠集」であろう。この他、浄弁が書写したとされる「伝浄弁本」が陽明叢書には紹介されている。今回取り上げるのは、後醍醐天皇筆とされるもの（以下、「伝後醍醐天皇筆本」または該本と称する）である。伝後醍醐天皇筆本は、鎌倉末期に書写されたものであり、何より奥書によって書写年次が明らかな点が重要である。また、粘葉本や関戸本など、平安期書写本には見られない、後世に増補された詩歌を相当数有する点でも注目される本文である。

惠 阪 友紀子

一、書誌

まず、伝後醍醐天皇筆本の書誌を示しておく。

上下二帖折本。帙に入れられたあと、三重の箱に納められている。上巻三十紙、下巻三十三紙。一紙縦二十九・〇裡、横四十七・五裡。上下巻で計十七紙分（全体の約四分の一）ほどが切り取られている。切り取られた箇所は次の通り。

上巻 夏部221 秋部325（約十紙分）

下巻 帝王660 將軍685（約二紙分）

詠史696下句、老人731（約三紙分）

述懐757後半、無常789（約三紙分）

「後醍醐天皇御宸筆」とする古筆了佐の極め札のほかに、川勝宗久（享保十八年付）、神田道伴（四代・享保十九年付）の折り

紙などが添えられ、筆者を後醍醐天皇と伝える。

内題は「和漢朗詠集上(下)」、尾題は「和漢朗詠集上(倭漢朗詠集下)」とある。外題は左上に絹地の題箋を貼り「和漢朗詠集上(下)」とするが、本文とは別筆で、川勝宗久・神田道伴の折り紙には、外題の筆者を青蓮院尊祐法親王とする。上下巻それぞれ冒頭に目録を備える。

薄墨の界線が上下各一条と行間にある。天地界高二十五・〇種、野間二・八種。七言詩は一行、和歌は二行書きで、和歌一行と漢詩一行は同じ幅に書写される。また、和歌の一部は草仮名で書かれている。作者注記・詩題注記はない。現状では、返り点が数箇所にあるが、送り仮名等は一切ない。上巻の作者注記および、返り点・仮名などは消された跡があり、現状で見られる返り点は消し残りであろう。他に朱のヲコト点があるが、書き入れ注や校合書き入れなどはない。

上下巻とも本文同筆の奥書があり、上巻「元応第一之天、無射中旬之候、動臨池浪動、降貫花之文耳」、下巻「元応元年初冬六日、翫散花之艶、終入木之功耳」とあり、書写は、上巻が元応元年(一三一九年)の九月中旬、下巻が同年十月六日であることが知られる。また下巻には、この本の伝来を伝える異筆の識語がある。

筆者と伝えられる後醍醐天皇は、文保三年(一三一九年)三月二十九日、三十一歳で即位、四月二十八日に元応に改元されており、年代は矛盾しない。本文の筆跡は、宸筆の置文などと比較して、可能性なしとはしない。

二、伝後醍醐天皇筆本の本文系統

伝後醍醐天皇筆本の本文について考えてみたい。「和漢朗詠集」の平安時代の写本は、およそ粘葉本系統と関戸本系統の二系統に分けられている。伝後醍醐天皇筆本は上巻春部末尾の項目の配列が、「躑躅」「款冬」「藤」となり、関戸本系統に一致する¹。その一方で、関戸本・雲紙本になく、粘葉本系統に見られる詩歌の大半、42 215 354 380 449 534 564 603 797(詩歌の番号は「新編国歌大観」による。以下同じ)を有している²。この他、関戸本・雲紙本には271 321 712 714 729 784の詩歌も存在しないが、これらの詩歌は、伝後醍醐天皇筆本では切り取られた箇所³に当たするため、確認できない。

伝後醍醐天皇筆本は、項目の配列は関戸本系統に一致するが、関戸本系統になく、粘葉本系統にのみ存在する詩歌を有しており、両系統の特徴を合わせ持つことになる。

もう少し細かく本文を確認しておきたい。両系統の本文異同箇所をいくつか示す。

まずは、伝後醍醐天皇筆本の本文が、粘葉本系統に一致し、関戸本系統に対立する箇所である（本文の引用は伝後醍醐天皇筆本により、適宜漢字を宛てた）。詩歌配列では、次の箇所が関戸本とは対立する。

201・202 粘葉本系統201・202 関戸本系統202・201

本文異同では、次のような例が挙げられる。

「雨」85 桜狩り雨はふりきぬおなじくは

ぬるとも花のかけに隠れむ

粘葉本系統「ぬる」 関戸本系統「もる」

「暁」416 佳人尺飾於晨粧、魏宮鐘動。

遊子猶行於残月、函谷鷄鳴。

粘葉本系統「魏宮」 関戸本系統「景陽」

「禁中」526 御垣もる衛士のたく火にあらねども

我も心のうちにこそ思へ

粘葉本系統「衛士のたく火に」

関戸本系統「そのたく火には」

粘葉本系統「うちに」 関戸本系統「なかに」

「閑居」613 不独記東都履道里有閑居泰適之叟。

亦_レ知皇唐太和歲有理世安樂之音。

粘葉本系統「令」 関戸本系統「欲」

次に関戸本系統に一致し、粘葉本系統に対立する例であるが、詩歌の配列では「霜」の項目に異同が見られる。

367・368 関戸本系統367・368 粘葉本系統368・367

本文異同の例には次のようなものがある。

「若菜」36 明日からは若菜つまむとしめし野に

昨日も今日も雪は降りつつ

関戸本系統「明日からは」 粘葉本系統「春たたば」

「紅梅」98 有色易分残雪底、無情難弁夕陽中。

関戸本系統「弁」 粘葉本系統「計」

「扇」202 天の川扇の風に雲はれて

空すみわたるかささぎの楯

関戸本系統「雲」 粘葉本系統「霧」

「述懐」755 車前驥病驚駘逸、架上鷹閑鳥雀飛。

関戸本系統「飛」 粘葉本系統「高」

この他、全体的には関戸本に一致する箇所が多いものの、関戸本系統に対立する例も少なくない。伝後醍醐天皇筆本は関戸本系統と粘葉本系統の本文が混在していると考えられるのである。

しかし、二系統の特徴を合わせ持つのは、該本に限ったことではない。平安書写の伝公任筆本や葦手下絵本などにもすでに見られる現象であり、鎌倉期以後に書写された本文にも共通する特徴と言える。

「和漢朗詠集」の系統としては、粘葉本・関戸本に大別されてはいるものの、流布した本文は、そのどちらかなのではなく、両系統が混ざり合った本文であったと考えられるのであり、どちらの系統に近いかということを考えてもあまり意味はない。

ところで、「和漢朗詠集」の本文は、出典に正確ではない場合が多く、意図的に本文を改訂している場合さえある。つまり、出典に一致する本文が、必ずしも「和漢朗詠集」での「正しい」本文とは限らないのである。さらに、勅撰集ではない気安さからか、調度品としての優美さ重視のためか、書写態度も忠実ではなく、字形の類似による誤写も多い。そのため、細かな本文異同を追っても本文の系統を知る手掛かりとはならないと思われるのである。

そこで、まずは大きな異同、詩歌の配列と出入りにしほって検討していきたい。

三、詩歌の配列と独自詩歌

まず、他本と詩歌の配列が異なる箇所を挙げる。校合には、堀部正二編著「校異和漢朗詠集」³⁾を用いる。

「春興」19↖20 20「歌酒家々」19「野草芳菲」(一致なし)

「柳」102↖103 103「漸欲抃他」102「林鶯何処」(一致なし)

「霜」367↖368 368「三秋岸雪」367「万物秋霜」

(粘葉本・伊予切以外は一致)

「山」496↖497 497「雲のある」496「名のみして」(一致なし)

「水付漁父」

512↖513 513「水駅路穿」512「帆開青草」(一致なし)

519↖520 520「水上の」519「年ごとに」(一致なし)

「故宮付故宅」

535↖536 536「向曉簾頭」535「荒籬見露」(一致なし)

537↖538 538「君まさで煙絶えにし」

537「君なくて荒れたる宿の」(伝寂然法師筆本など)

「無常」797↖798 798「末の露」797「手にむすぶ」(一致なし)

「霜」や「故宮」の異同は他本に一致するものが見られるが、

その他の配列は他本に見えず、該本独自の配列となっている。

このうち「春興」では作者が、18白居易詩、19劉禹錫詩、20白

居易詩であり、伝後醍醐天皇筆本のように、18・20・19と並び替えると白居易詩・白居易詩・劉禹錫詩となり、詩人ごとの配列になる。「和漢朗詠集」での項目内の詩歌の配列は、唐人作の漢詩文・日本人作の漢詩文・和歌の順で、さらに漢詩文は作者ごとにまとめて配列されている。そのため、該本で19と20を入れ替えたことは、理にかなったものと言える。ただし、該本には作者注記がないので、作者ごとに並べ替えるという意図をもつて順序を入れ替えられたのであれば、該本の処置とは考え難い。その他の箇所については、作者ごとにまとめるといった積極的な理由は見あたらず、逆に入れ替えたことよって、配列に不備が出ることもないため、意図的な改変とは思われない。

次に、該本の誤脱と思われる詩歌は次の三首である（一）内は該本に一致する本文）。

〔雪〕 383 「雪ふれば」ナシ（京都府立図書館蔵古鈔本）

〔仏名〕 396 「かぞふれば」ナシ（二致なし）

〔山寺〕 584 「泉飛雨洗」ナシ（雲紙本）

〔雪〕 383、「仏名」396はどちらも項目内では最後に、「山寺」584は漢詩句の中では最後に位置する。同じ詩歌を脱する諸本があるものの、いずれも項目内での最後の詩歌であることから、書き漏らした可能性のほうが高い。

最後に、粘葉本系統にも関戸本系統にも見られない詩歌を挙げておく（アルファベットは、便宜上付したものの。（一）内は同詩歌を所有する本文）。

〔藤〕 133 「悵望慈恩」の前（伝二条為氏筆本など）

A 紫茸偏奪朱衣色、応是花心忘懸台。

〔仏名〕 396 「あらたまの」の前（伝二条為氏筆本など）

B 年の内につくれる罪もかきくらし
降る白雪とともに消えなむ

〔風〕 402 「ほのほのと」の次（扇明文庫蔵伝清井筆本）

C 霜は置き露はむすべる草のいほは
風よりほかにとふ人ぞなき

〔松〕 422 「青山有雪」の次（山城切など）

D 琴商改曲吹煙後、簫瑟催心学雨辰。

〔竹〕 434 「しぐれふる」の前（山城切など）

E 世にふればことの葉しげき呉竹の
うきふしことに鶯ぞなく

〔庚申〕 652 「沖なかの」の次（伝公任筆本など）

F いかで猶人にも問はむあやしきを
思はぬなかのえさるまじきを

〔交友〕 733 「琴詩酒友」の前（伝二条為氏筆本など）

G 志合則胡越為昆弟、由余子臧是也。

不合則骨肉為讎敵、朱象管察是也。

「無常」795 「世の中を何にたとへむ」の次（近衛本・関戸本など）

H 世の中は夢かうつつかうつつとも

夢とも知らずありてなければ

A〜Hのうち、「無常」のHは、粘葉本にはないが、関戸本・

雲紙本のみならず、粘葉本系統の近衛本にも存在する。その他、山城切や伝公任筆本など、平安期書写を始め多くの諸本に見られる歌である。さらに、直前の795もHも「世の中」で始まる歌であるため、Hは粘葉本の誤脱である可能性もある。（下）

残り七首のうち、C歌は伝浄弁筆本にのみ見える歌である。（上）本文には多少の異同があるものの、C歌は他出・典拠が確認できず、現在ともに陽明文庫に蔵される点からも、両者の関係が注目される。（下）

ここで、A〜Gを持つ諸本の状況を整理しておきたい（一）は略号、■は現存しない箇所、〈 〉は行間や細字で補入された本文化していない詩歌。

岩瀬文庫蔵弘安本（弘）
京都府立図書館古鈔本（京）

	上巻	下巻
A・B	■・■・■・■	■・■・■・■
A・B	■・■・■・■	■・■・■・■

陽明文庫蔵伝浄弁筆本（浄）

◆伝後醍醐天皇筆本（醍）

尊経閣文庫蔵伝為氏筆本（為）

岩瀬文庫蔵延慶本（延）

伝世尊寺行尹筆本（尹）

大東急文庫蔵嘉暦本（嘉）
天理図書館蔵貞和本（貞）

〈A〉	C・D・E・
A・B	C・D・E・F・G
A・B	D・■・
A・B	D・E・
A・B	D・E・F・
〈B〉	D・E・
〈A〉〈B〉	・(D)E(F)・

詩歌の出入りを一覧にすると、大まかに、A・Bを持つグループ、D・Eを持つグループ、Fを持つグループ、Gを持つグループの四つに分かれる。

伝後醍醐天皇筆本の場合、これらの四グループすべての詩歌を持ち合わせている。少なくとも四グループの本と、さらにCを持つ本を校合したものが親本であったのではないかと思われる。

伝後醍醐天皇筆本に一番近いのは伝為氏筆本と延慶本である。この両本はCとFの歌を持たない点以外は一致する。つまり、A・Bのグループ、D・Eのグループ、Gを持つ三種類の本を校合した本があり、それを書写したのが、伝為氏筆本と延慶本で、ここにさらにC、Fをもつそれぞれの本を校合した本が加わったのが伝後醍醐天皇筆本ではないだろうか。

以上、詩歌の出入りからまとめてみると、伝後醍醐天皇筆本は、伝為氏筆本、延慶本、伝世尊寺行尹筆本と近い関係にあるものと思われる。伝浄弁筆本は、C歌を共有する点に注目されるが、他の詩歌の共有は少なく、直接の書承関係はないようである。

では、独自詩歌が共通するこれらの諸本と、該本の本文について詳しく比較してみたい。

全体的に見れば、歌の出入りがおおむね一致した延慶本、伝世尊寺行尹筆本などとは近い関係にある。一方で、細部の本文には異同も少なくない。

「子日」32 ちとせまで限れる松も今日よりは

君にひかれて万代や経む

「限れる」(醍・弘・嘉)

「ちぎりし」(粘・伊・関・雲・尹・貞)

「ちぎれる」(為・延・浄) *京：当該箇所なし

「晩夏」169 夏はつる扇と秋の白露と

いづれかさきに置かむとするらむ

「さきに」(醍・弘・尹・京)

「まづは」(粘・伊・関・雲・延・嘉・浄)

「昔昔昔」(まづは)「為」(まづは)「サキニ」傍記 貞

「蟬」194 鳥下緑蕪葉苑静、蟬鳴黄葉漢宮秋。

「静」醍・弘・延 「寂」粘・伊・為・尹・嘉・京・浄

「静」(寂)傍記)貞 「夕」関・雲

このように、誤写ではない異同箇所でも、相違が見られるのである。伝後醍醐天皇筆本と最も近いのは弘安本である。32・169・194の例ではいずれも弘安本と一致する。同じく、

「鶯」73 あさみどり春たつ空に鶯の

初声きかぬ人はあらじな

「きかぬ」(醍・弘)

「待たぬ」(粘・伊・関・雲・為・延・尹・嘉・浄・貞)

この73の第四句は、弘安本のみ「初声きかぬ」とあり、該本と一致する。同様に、夏部の項目「たちばな」では、粘葉本系統が「橘花」、関戸本系統ほか「花橘」とするところを、伝後醍醐天皇筆本と弘安本のみが「虚橘」とするなど、弘安本との一致が注目される。弘安本は上巻のみの零本であり、下巻の比較はできないのが残念である。

そのほかには、夏部「螢」190は、粘葉本・関戸本など、多くの本には「草ふかく荒れたる宿のともしびの風に消えぬは螢なりけり」とあるが、該本と里見忠三郎氏蔵伝後京極良経筆本のみは、第三句から第四句を「ともしびは風にきえせぬ」とする。

また、

「仙家」533 ぬれてほす山路の菊の露の間に

いつか千年を我は経にけむ

「いつか千年を我は経にけむ」(醍・貞)

「いかにちとせをわれはへぬらん」(尹)

「いかでかわれにちよをへぬらむ」(浄)

「いかでかわれは千代をへぬらむ」(その他諸本)

のように、533では、貞和本とのみ同じ本文を有する。これらのように少数派の本文に一致する箇所も少なくはないが、弘安本以外では、特定の本文と一致する傾向はない。

四、伝後醍醐天皇筆本の書写態度

最後に、伝後醍醐天皇筆本の書写態度について見ておきたい。

該本の独自本文は、春部「三月三日付桃」44番歌「みちとせになるてふ桃の今年より花さく春にあひそめにけり」の第一句を「みとせに」、「款冬」44「書窓有卷相取捨」の「取捨」を「取捨」に、下巻の項目名「故京」を「故郷」にするなど、単純な誤写が多い。また、秋部「立秋」の204では、本来「誰教計会一時秋」と書くべきところを「誰計会一時秋教」とする。これは、

「教」の字を抜かしてしまったため、最後に加えたものと思われる。

伝後醍醐天皇筆本は、このように、かなり大雑把な書写態度がうかがえるのである。先に述べた配列の入れ替わりも、何らかの意図を持って変えたのではなく、書写の際に一首書き落としてしまったものを、後ろに書き足したのだろう。

まとめ

以上の点から、伝後醍醐天皇筆本についてまとめると、誤写と思われる独自異文や、詩歌の配列が目立つ点から、本文にあまり忠実ではない書写態度が見受けられる。また、全体の約四分の一が切り取られて現存しないことも惜しまれる点である。「和漢朗詠集」の写本は多く、鎌倉期までのものに限っても相当数が現存し、この点では、本文に不備があり、かつ全体が存在しない該本の価値は薄いようにも感じられる。

しかし、「和漢朗詠集」の流布状況、鎌倉期以後の「和漢朗詠集」の本文を知るうえで欠くべからざる資料であるといえる。その第一は、伝後醍醐天皇筆本が、粘葉本・関戸本の西系統ともに存在しない独自の詩歌を七首有することである。

「和漢朗詠集」は漢詩文を含むため、書体の類似による漢字の誤写が非常に多く、異同が複雑で、個々の本文異同からだけで諸本を整理することは困難な状況である。そのため、特殊な詩歌があれば、それを手掛かりに本文の来歴を知ることができるのである。

第二には、上下巻とも書写年次が記されている点である。書写年が明らかかな写本に独自詩歌があれば、その詩歌が増補された時期が絞り込める。この点で、書写年が明らかかな伝後醍醐天皇筆本は重要な意味を持ち、平安期以後の諸本の様相を探る上では貴重な資料と言えるのである。

〔注〕

- (1) 三木雅博氏「和漢朗詠集とその享受」(一九九五年・勉誠社)の中で、上巻末尾の項目配列が、単なる誤写などではなく、意図的に配列が変えられていることを指摘されている。
- (2) 詩歌の出入りについては、拙稿「和漢朗詠集」の増補詩歌〔国語国文・二〇一〇年九月号〕参照。
- (3) 堀部正二編著・片桐洋一補「校異和漢朗詠集」(大学堂書店、昭和五十六年)
- (4) ただし、H歌を粘葉本の誤脱と考えると、「無常」には和

歌が四首とられていたことになる。「仏事」を除くと、「和漢朗詠集」の一項目内での和歌の数は三首が最大であるため、疑問が残る。ちなみに、関戸本・雲紙本・伝公任筆本などは、797「手に結ぶ」歌がなく、796・H・797の三首になっている。

(5) 他に、もう一本、今治市河野信一記念美術館蔵伝行忠筆本にも同じ歌があるが、これは書写年代がかなり下がるので、今は除いておく。

(6) 独自詩歌・増補詩歌については、注2の拙稿を参照。

(えさか ゆきこ) / 本学非常勤講師